相模経済新聞　2022年7月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

47

パンデミックと科学の進化

当コラムでは、「全ての生命現象は化学反応である」との解釈をもとに、哲学を構築してきた。人間の脳の機能で生み出される精神的な活動も、化学反応として説明できる筈である。現在、説明できていないのは、科学が未成熟なためであり、科学の未来には大いなる進化が約束されていると考えたい。

世界は今、COVID−19（新型コロナ感染症）のパンデミックとロシアーウクライナ戦争で、空前の混乱状態にある。過去には、このような社会不安の中、人類の活動が極限まで落ち込んでいる時に、革命的な躍進が科学の世界で成し遂げられたケースがある。その一つは、1660年代にヨーロッパでペスト（黒死病）が流行した時で、多くの人が都市を離れ、田舎で感染をやり過ごした。天才的な物理学者のアイザック・ニュートンも故郷に避難して、例のリンゴの樹の下で「万有引力」の法則を発見し、科学の世界に大きな足跡を残した。近代科学が誕生した、まさに歴史的な時代であった。この時のリンゴの木の分株は、現在も東京小石川植物園に生木として保存されている。この樹の前で、若い人達が思索に耽り、新しい科学理論の発見につながることを期待したい。

ニュートンの生家のリンゴの木から接ぎ木で増やされ、日本に贈られたリンゴの木
（東京大学小石川植物園HPより）

今からおよそ100年前の第一次世界大戦とスペイン風邪の時は、まさに世界的なパンデミックで、社会はどん底の停滞状態であった。

しかし、科学界の若き多くの天才たちは、力を合わせて「量子力学」という新しい学問領域を切り開いた。その時の旗手の一人で、波動方程式の使い手のエルニー・シュレディンガーは、注目される学問の領域が物理学から生物学へシフトすることを見越して、「生命とは何か」というセンセーショナルな書籍を世に出した。その結果、生命科学が長足の進歩を遂げ、生命現象に鋭い科学のメスが入り、遺伝子の改変、人工生命、人工知能などの研究テーマが、科学の表舞台に躍り出てきた。宇宙科学も含めて、まさに近代科学・技術の力が試される正念場になってきている。

このCOVID−19パンデミックの世の中で、深く静かに潜行している科学技術の実体はどのようなものだろうか。人の精神機能の解明も含めて、科学の進化に胸が躍る時代に突入している。その進化が、宇宙生命哲学の規範から外れたものでないことを願うばかりである。